

ご挨拶

私達「古事記に親しむ会」は、2013年6月に発足し、毎月第2木曜日、市川市中央公民館で、学び続けています。講師・千葉大学准教授兼岡理恵先生のご指導の下、全員と一緒に音読し先生に解説を頂いております。

この度、更なる古事記の普及活動の一環として、ピアノ・朗読の神武夏子さん及びフルート・齊藤歩さんのご協力を得て、市川の地で第1回古事記ピアノコンサートを開催できますこと大変嬉しく存じます。一人でも多くの方が「古事記」に親しまれますことを願っております。

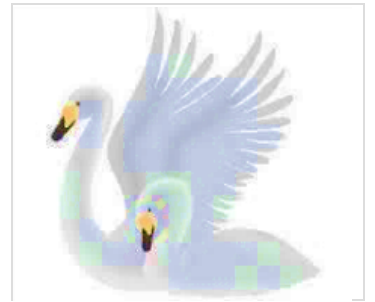
古事記に親しむ会 代表 宇野友章

長い間クラシックのピアニストとして、1920年代のフランス音楽を演奏してまいりましたが、2012年古事記編纂1300年に際し、日本人の心を伝える古事記がとても大事で、もっと多くの方に読んで頂きたいと思い、古事記を音楽で表現する活動を始めました。人から人へと口伝えに伝えられ、常に減びていく者の立場から語られた古事記。そこに登場する神々、人々の生き様は生き生きと描かれており、現代の私達にいにしえの人々の声を届けてくれます。少しでもその声を感じて頂けましたら幸いです。

ピアニスト・作曲家・朗読家 神武夏子



プログラム



第一部 (上巻より)

第二部 (中巻より)

♪ てんちそうぞう 天地創造 神武夏子・齊藤歩作曲

♪ あまてらすおおみかみ 天照大御神 神武夏子作曲

♪ あめのいわやど 天岩屋戸 齊藤歩作曲

♪ やまたおろち 八俣の大蛇 神武夏子作曲

♪ やくもた 八雲立つ 神武夏子作曲

♪ いなばしろうさぎ 稲羽の白兔 神武夏子作曲

♪ くにゆず 国譲り 齊藤歩作曲

♪ のりと 祝詞 神武夏子作曲

♪ てんそんこうりん 天孫降臨 神武夏子作曲・齊藤歩編曲

♪ じんむてんのう 神武天皇 神武夏子作曲

♪ みつみつしくめの子ら 齊藤歩作曲

♪ ひめ サホ姫 齊藤歩作曲

♪ みこと ヤマトタケルノ命 神武夏子作曲

♪ あづまのくに えんせい 東国への遠征 神武夏子作曲

♪ ぼうきょう うた 望郷の歌 神武夏子作曲

♪ はくちょう 白鳥 齊藤歩作曲

♪ ナカツマキ 神武夏子作曲・齊藤歩編曲
(中巻)

曲目解説(歌と訳)

あはふ 栗生には 臭^か葎一本 其^そねが本^{もと}
その^{その}ね^ねめ^め 其根芽つなぎて 撃ちてし止まむ

(勇ましい久米の兵士たちが、栗の畑に生える臭いニラのような敵を、根とつながった芽も一緒に引き抜こう、撃たずにはおくものか。)

みつみつし 久米の子らが
垣^{かきもと}下に 植^はえし 椒^{はしかみ}

口^{くち}ひびく 我は忘れじ 撃ちてし止まむ
(勇ましい久米の子らが、垣根の下に植えた山椒がひりひりするように、心の痛手は忘れられない。撃たずにはおくものか。)

かみかぜ 神風の 伊勢の海の 大石に 這^{おひし}ひ廻^はろふ
細^{しただみ}縲の い這ひ廻り 撃ちてし止まむ

(神風がふく伊勢の海にある大きな岩を這い廻る細螺、這い廻っても撃たずにはおくものか。)

♪ 東国への遠征

ひさかたの 天の香^{あめ}具^か山^{ぐやま} とかまに
さ渡る 鶴^{くび} 織^{ひは}細^{ほそ} 撓^{たわ}や腕^{がひな}を
枕^{まくら}かむとは 吾はすれど

さ寝むとは 吾は思へど
汝^なが着^けせる 襲^{おすひ}の裾^{すそ}に 月立ちにけり

(天の香具山を、白い白鳥が渡っていく。白鳥の細い首のように、しなやかなお前の腕を巻いて、枕を共にしようと私は思うが、長く待たせたので、お前の襲の裾に月が昇ってしまった。)

たか 高光る 日の御子 やすみしし 我が大君^{おほきみ}
あらたまの 年が来^き経^ふれば あらたまの
月^{つき}は来^き経^ふゆく 諾^{うべ}な諾^{うべ}な 君^{きみ}待^{まち}ちがたに
我が着^けせる 襲^{おすひ}の裾^{すそ}に 月^{つき}立^たむよ

(天に輝く太陽の御子、私の気高い大君。新しい年が来れば、月は過ぎていきます。約束の時から、どんなにあなた様を待ち焦がれたことでしょうか。ですからこのように私の服に月も昇るのです。)

♪ 八雲立つ

八雲立つ 出^や雲^{へがき}八重垣 妻^{つま}ごみに
八重垣作る その八重垣を

(雲が八重に立ち上がる出雲の国に 宮殿を取り組む八重垣よ そこに妻を住ませる そのすばらしい八重垣よ)

♪ 祝詞

この我がきれる火は 高天原には
カミムスヒの御祖命 (ミオヤノミコト) の
とだる 天の新巢^{すす}の凝^す烟^すの 八拳垂るまで
焼き挙げ 地^ちの下^{ひろ}は 底^{なは}つ石^{なは}根^{なは}に焼きこら
して 拷^{たくなは}縄^{なは}の 千^ち尋^{ひろ}縄^{なは}打^なち延^はへ 釣^つせし
海^{あま}人の 口^{くち}大^{おほ}の 尾^お翼^{つば}鱸^{すずき} さわさわに
控^ひき依^よせ騰^{たか}げて 打^う竹^{たけ}の とををををををに
天^{あま}の真^ま魚^{なぐひ}昨^{きの} 献^{けん}る

(私がおこす火は、高天原にいるカミムスヒノ神の新しい台所で焚き上げた、煙の煤が八握くらい垂れ、地には固く岩になるまで焼いた火です。拷縄を長く海中に延ばして、釣り人が大きな口の尾翼鱸を、賑やかに引き寄せて釣り上げ、竹の台にいっぱい載せて、真魚の御饗を献上しましょう。)

♪ みつみつし久米の子ら

忍^{おさか}坂^かの 大^{おお}室^{むろや}屋^やに 人^{ひと}多^{さわ}に 来^き入^いり居^おり
人多^おに 入^いり居^おりとも みつみつし
久^く米^{ぶつ}の子^つが 頭^{いし}椎^つい 石^{いし}椎^つい
撃^うちてし止^とまむ

みつみつし 久米の子が
頭椎い 石椎もち 今撃たらば良らし

(忍坂の大きな室屋にたくさんの方がいる。どんなにたくさんいても、勇ましい久米の兵士たちが頭椎の太刀、石椎の太刀で撃たずにはおくものか。勇ましい久米の子が頭椎の太刀で、今こそ撃つが良い。)

みつみつし 久米の子らが

♪ 望郷の歌

・大和は 国の真^ま秀^ほろば

畳^{たた}なづく 青垣

山籠^{ごも}れる 大和しうるはし

(大和はどの国より秀でた国、山々は青垣の
ように重なり合っている。その山々に囲ま
れている、なつかしいふるさと大和、うる
わしい国よ)